

研究ノート

都市コミュニティにおけるボランティア活動の継続に関する一考察
- SCAT 法によるテキストデータ分析の試み -

永井 拓己

日本福祉大学 健康科学部 実習教育センター

A study on the continuation of volunteer activity in urban community
- Attempt of text data analysis by SCAT method -

Takumi Nagai

Nihon Fukushi University, Faculty of Health Sciences, Practice Education Center

Keywords: 都市コミュニティ, ボランティア活動, SCAT 法

1. はじめに

2000年に介護保険法が施行され、2006年には全国に地域包括支援センターが設置される等、福祉サービスの整備が進められてきている。その一方「高齢者の地域におけるライフスタイルに関する調査」¹⁾では、全体の42.9%の高齢者が孤独死を身近に感じると回答したこと、小都市・町村では孤独死を身近に感じると回答した人は30%代であったが、大都市・中都市では45%であり、大都市・中都市の方が増加傾向にあることを報告している。そして、特に大都市・中都市では、人間関係の希薄化が進展していることを付け加えている。このような状況のなか、「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」²⁾は、地域における多様な生活ニーズへの的確な対応を図るために、地域に新たな支えあい(共助)を創出し、拡大強化していくことを今後の課題としている。

そこで本研究の目的は、支えあい活動としてのボランティア活動に着目し、都市部で長年ボランティア活動を行っている人を対象とし、どのような背景やきっかけが

ボランティア活動を始めようとする行為につながったのか、そして、その活動が継続するにはどのようなことが関わっているのかを探究することである。

2. 研究方法

調査対象は、政令指定都市 Y 市 Z 区で、ボランティアを長期間行っている人々(40歳代~70歳代までの男女計9名)を対象とし、半構造化インタビューを行う。インタビューの所要時間は、一人60分~90分程度であり、基本属性の他、これまで取り組んできたボランティア、日常生活、地域での役割などを話の流れに沿って質問を行う。

また分析には、大谷が考案した4ステップコーディングによる質的分析手法「SCAT (Steps for Coding and Theorization)」³⁾を用いる。これは面接記録などの言語データをセグメント化し、それぞれに 1 データの中の注目すべき語句、2 それを言い換えるためのデータ外の語句、3 それを説明するための語句、4 そこから浮きあがるテーマ・構成概念の順に4ステップのコー

ディングを行い、それをもとにストーリーラインの記述を行うものである。この手法の特長について考案者の大谷は、比較小さな質的データの分析にも有効であること、小さなストーリーラインを紡ぎ、大きなストーリーラインにすることで、大きなデータの分析も可能であること、質的データから分析を行う際に、比較的スムーズに理論化を導くことができることの3つをあげている。

倫理的配慮としては、インタビュー予定者に調査の概要を説明した。インタビューでは、研究論文以外で使用しないこと、プライバシーを厳守することを条件に、調査および論文での使用に同意をいただき、署名捺印をしていただいた。

3. 分析結果

前述した SCAT 手法を用いて、分析を行った結果を以下に示す。

インタビュー対象者の基本属性は表1の通りである。

インタビューを行った後、テープ起こしを行った9名の全テキストデータのうち、ボランティア活動を行った背景・きっかけとして捉えられるもの、ボランティア活動の継続に関わっていると思われるものを抜き出し、それをSCAT法における4ステップコーディングのフォーマットに落とし、分析を試みた。本稿では、A氏の分

析過程を例としてあげるが(表2,表3参照)、残りの8名に対しても同様の方法で分析を試みた。

以上のような過程を踏まえ、9名のストーリーラインから導き出されたボランティア活動を行った背景・きっかけは、表4の通りである。

表4の結果を踏まえ、ボランティア活動を行った背景・きっかけについては、次の三つに分類できた。

一つ目は、内発的活動型である。ボランティアな活動を経験したり、他者から高いニーズがあることを実感したり、他者のために役立つことがしたいという思いがあるなど、主に自らが過去に経験したことや実感したことが影響している。

二つ目は、外発的活動型である。障害を持つ子どもを思う気持や障害者の関係者側からのノーマライゼーションの啓発活動が目的など、主に他者が影響している。

三つ目は、社会家関係構築型である。ボランティア活動を通して、他者の役に立つことで、他者とのつながりを求めようとする。

次に、9名のストーリーラインから導き出されたボランティア活動の継続に関する事項については、表5の通りである。

表5の結果を踏まえ、ボランティア活動の継続に関する事項については、次の五つに分類できた。

表1 インタビュー対象者の基本属性

氏名	出身地	同居家族	仕事	ボランティア活動
A氏 (70歳代・男性)	関東地方	妻	元会社員	子育てサロン等
B氏 (50歳代・女性)	Y市近郊	夫, 長男	自営業	リラクゼーション
C氏 (60歳代・女性)	九州地方	長男, 次男	元自営業	福祉啓発活動等
D氏 (70歳代・女性)	関東地方	夫, 長女, 長男	主婦	福祉啓発活動等
E氏 (60歳代・女性)	Y市近郊	夫, 姑	元会社員	民生委員等
F氏 (60歳代・女性)	Y市内	夫, 次女の夫婦	主婦	民生委員等
G氏 (60歳代・女性)	Y市内	単身	元自営業	傾聴ボランティア等
H氏 (70歳代・男性)	関西地方	妻	元会社員	傾聴ボランティア等
I氏 (40歳代・女性)	Y市内	夫, 娘3人	元幼稚園教諭	子育てサロン等

表2 SCAT法を用いて行ったA氏の背景・きっかけの分析

発話者	テキスト	テキスト中の注目すべき語句	テキスト中の語句の言い換え	左を説明するようなテキストの概念	テーマ・構成概念
A氏	で、下の娘が中学校のときに、私が44、45の時にPTAの会長をやらしてもらって、その時に、卒業式の時に祝辞を述べたりして、家に帰ってきてから、そうじゃあ定年退職したら、この子たちが結婚して、子どもができる頃になるだろうから、そしたらPTAの会長をやったころのことを思いだして、子どもたちの何かをやればよい、今みたいにボランティアって言葉ははっきりなかったけど、子ども会のなんかをやればよいのかなという思いが一つあったのと、	PTAの会長、定年退職、子ども会のなんかをやればよい	PTA会長の経験、定年退職後の進路に対する考え	体験・経験から感じる将来展望	ボランティア活動を経験したことが、自らの定年退職後の過ごし方に影響を与えている。
A氏	マンションを買った後に、親父、お袋がきて、そのときに、「マンション買ったのはいいけど、地に足が付いていないわけた。マンション暮らしの人は、地域の人たちと交流がないみたいだと聞くけども。娘二人地域でお世話になってしていくから、退職した後は地域にお世話になったから地域に恩返ししなさいよ、心がけなさいよ、育ててもらったんだから」と言われた。これが私のボランティアの原点である。	マンションを買った、地に足がついていない、親父、地域でお世話になる、恩返し、ボランティアの原点	マンション購入、地縁の希薄化、父親、恩返し、ボランティア活動の動機	地縁の希薄化に対する懸念、父親からの助言	地縁の希薄化を懸念した父親が、Aさんに地域に世話になるため、地域に恩返しすることを助言した。

ストーリーライン

A氏は、ボランティアな活動を経験したことが、自らの定年退職後の過ごし方としてのボランティアを選択させる。また、A氏はマンションを購入しているが、そこに住むことによる地縁の希薄化を懸念した父親が、A氏に地域に世話になるため、恩返しすることを助言したこともボランティアにつながっている。

理論的記述

- ・PTA活動を経験したことが、自らの定年退職後の過ごし方としてのボランティアを選択させる。
- ・退職後の人間関係の希薄化を懸念した親族から助言を受けた。

さらに追究すべき点・課題

- ・A氏はPTAを経験したが、他のボランティアな活動でもありえることなのか。

一つ目は、自己評価である。活動対象者から信頼されていたり、気を使ってもらったりすることで、自らが活動対象者にとって大切な存在であることを実感している。また、グループには異性の存在が重要という観点から、グループにおける存在意義を感じている。

二つ目は、活動評価である。ボランティア体験を振り返り、楽しいという思いを想起させることや、他者を自らの活動に誘ったところ感謝されたり、活動依頼者にグループの解散を伝えた後、活動依頼者が戸惑ったことから、自らの活動が評価されていることを感じている。加えて、自らが行う活動はボランティアであるというポリシーがあると、グループ解散等の枠を超え活動を続けさせる。

三つ目は、人間関係拡大である。日常ではあまり関わることができない人たちと関われたと感じたり、福祉関係者との関わる機会が増えたと感じる。

四つ目は、仲間意識の高揚である。ボランティア同じ志を持った仲間との出会い、共に活動できることに喜びや満足感を得ている。

五つ目は、知識・情報の蓄積である。福祉のことを知る機会が増えたり、理解が浅いと思われる福祉の領域のことに対して理解が深まったりしている。また老後の備えとして、福祉施設のことを知っておきたいという考えもあった。そして、多様な人々と知り合い多様な価値観があることを認識したりもしていた。

表3 SCAT 法を用いて行った A 氏の活動継続に関する事項の分析

発話者	テキスト	テキスト中の注目すべき語句	テキスト中の語句の言い換え	左を説明するようなテキストの概念	テーマ・構成概念
A 氏	ただね、ボラねっとの個人会員の人に男性だけでも、個人でやろうと思っているんだけど、どんな心がけでやればいいんですかときかれたのね。心がけていったって、ボラをやりたいという気持ちさえあれば、後はボランティアをやってみて、自分が楽しかったなと思えばいいですよ。もし楽しくなかったら、自分のかかり方が度合いが少ないと楽しくないと思いますよと。ボランティアの気持ちになって、相手の気持ちになって、その中に入りこんでいくとああ今日は楽しかったと。そのうちにね、参加している人のお年寄り、子どもの笑顔をみて、楽しかったと言ってもらって、その一言だけでも楽しくなるものですよ。楽しかったと自分は思えばいいですよ。ボランティアをやっているという気持はなくなると、ボランティアはできるんですよ。じゃあ自分でもできそうですねって今でも続けていますよ。	ボランティアをやりたいという気持ちさえあれば、後はボランティアをやってみて、自分が楽しかったなと思えばいいですよ	自らのボランティア体験、満足感の高揚、活動対象者からの好反応	体験の機会の創出、ボランティア活動の魅力の再確認	自己のボランティア体験の振り返り、満足感
A 氏	子育てサロンの S さんっていったね。まだ半年くらいかな。若いころは学校の先生で、結婚しないでずっといままでいてね。今父親と二人で住んで、その人が M 団体にいてね。よくしゃべる人でね。私結婚していないので、赤ちゃんを抱いたことがないのでと言われ、子育てサロンを紹介したら、一回目で楽しいですね！！とってね。メンバーに入ってもらって、いまだに言いますね。A さん、誘ってもらって本当によかった。あれが本当のボランティアですよって。	子育てサロンを紹介、一回目で楽しいですね、誘ってもらって本当によかった	ボランティアを紹介、紹介した人からの好反応、感謝	紹介したことによる他者からの好反応、他者からの感謝	自らがやっている活動に他者を誘った、感謝を受けた。
A 氏	X 施設でやってほしいって言われて 30 日にやって、V 施設でも年に 2 回、夏の冷たいうどんと、年越しうどんと、3 年くらいやって、辞めちゃったんだよといったら、どうしよう、どうしようっていうもんだから、今までやってきてくれた職員さんの頼みならってんで、元のメンバーを何人が集めてやるよって、年中行事の中に入ってたんだ。児童館でもやって、20 人定員で、古いメンバー 3、4 人に声をかけてやる。	辞めちゃったんだよ、どうしよう、古いメンバー 3、4 人に声をかけてやる	グループの解散、迷い、思いが強い人とのつながり	解散による活動依頼者の戸惑い、志が高い仲間	ボランティアグループの解散を活動依頼に伝えた、活動対象者が戸惑ったが、志が高い数人の仲間
A 氏	メンバーを増やしたいと思ったときに、薬膳料理をやっている人が入ってきて、いいなと思っていたら、薬膳料理の人たちに声をかけて、やっている人がめん打ちにたくさん入ってきた。薬膳料理はボランティアではないですから、自分たちだけで料理を研究するもの。月に 1 回定例会、勉強会をやって、そのほかはボランティアをやりますよと。勉強会は 3 割ぐらいの力で、ボランティアを 7 割ぐらいの	ボランティアではない、ボランティアの出席率が悪い、ボランティアじゃない、私は下させていただきますよ	ボランティアであるというポリシー、辞意の表明	ボランティアとしての自覚	自らの活動は、ボランティアというポリシーを保持

<p>力でやってますからといってたんですけど。全部で18人ぐらいになってね。ところが、いざボランティアをやるといったときに、薬膳料理からの出席率が悪くなって。1年間ぐらいやってみたら、やっぱり少なくて特に薬膳料理から来た人たちの。データまでとって、ボランティアに力がいらないみたいなので、とりあえず私は下ろさせていただきますと。初期ころのボランティアで作ってみんなで一緒に食べていただくというのが主で、メニューづくりの勉強として、月1回の勉強会をやるかといっているの。ボラの出席率は45%ぐらいなのに、定例会だけ80%、これではボランティアじゃないと。やるならやってもらって結構と。</p>				
---	--	--	--	--

<p>ストーリーライン</p> <p>A氏は、自己のボランティア体験を振り返り、満足感を感じている。またA氏は、自らが行っている活動に他者を誘ったところ、その他者から感謝を受けた。A氏が所属していたボランティアグループは、新メンバーと旧メンバーのボランティアに対する意識の差がうまれ解散することになった。A氏は、自らが行う活動は自己学習的なものではなく、ボランティアであるというポリシーを保持しており、グループ解散後も志の高い仲間とともに活動を行っている。また、グループの解散を活動依頼者に伝えたと、活動依頼者が戸惑った経験がある。</p>
<p>理論的記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己のボランティア体験を振り返り、満足感を得る。 ・他者を自らの活動に誘ったところ、その他者から感謝された。 ・自らが行う活動は、自己学習的なものではなく、ボランティアであるというポリシーがある。 ・活動対象者にグループの解散を伝えたと、活動依頼者が戸惑った。
<p>さらに追究すべき点・課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自らが行う活動の自己評価を高める方法が他にはないのか。 ・ボランティアの意識が高い人たちと共に活動することは、モチベーションの高揚につながるのか。

表4 ボランティア活動を行った背景・きっかけ

A氏	<ul style="list-style-type: none"> ・PTA活動を経験したことが、自らの定年退職後の過ごし方としてのボランティアを選択させた。 ・退職後の人間関係の希薄化を懸念した親族から助言を受けた。
B氏	<ul style="list-style-type: none"> ・自らが行おうとしている活動に対して、他者から高いニーズがあることを知った。 ・店の常連客以外のニーズの存在が、ボランティアグループの立ち上げに強く影響を及ぼした。
C氏	<ul style="list-style-type: none"> ・障害を持つ子どもを思う気持ちが講座への参加行動を起こしたことが、ボランティアを始めるきっかけだった。
D氏	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に対して広くノーマライゼーションの啓発活動が必要だと実感し、ボランティア活動に参加するようになった。
E氏	<ul style="list-style-type: none"> ・将来、地域に世話になると考え、元気なうちに地域のために活動しようと思った。
F氏	<ul style="list-style-type: none"> ・嫁いだ先が昔ながらの厳格な家庭であり、それを知っていた近所の人が、Fさんを外へ出すきっかけとして活動を勧めた。
G氏	<ul style="list-style-type: none"> ・退職後はボランティア活動を行いたいと考えていた亡き夫の意志を継いで、友人から誘われていたボランティア活動に参加した。
H氏	<ul style="list-style-type: none"> ・転勤で全国に移り住んでいたため、地域の友人が少なかったが、何か他者のために役立つことがしたいと思い、ボランティア活動をはじめた。
I氏	<ul style="list-style-type: none"> ・近隣関係を気にする家庭環境では、遠隔地でのボランティアが社会とつながるツールとなる。

表5 ボランティア活動の継続に関する事項

A氏	<ul style="list-style-type: none"> ・自己のボランティア体験の振り返り、満足感を得る。 ・他者を自らの活動に誘ったところ、その他者から感謝された。 ・自らが行う活動は、自己学習的なものではなく、ボランティアであるというポリシーがある。 ・活動依頼者にグループの解散を伝えた後、活動依頼者が戸惑った。
B氏	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の対象者から、自分たちが行っている活動に対して高い評価を受けたり、想定していた対象者以外にも良い評価を受けた。 ・日常の枠を超えて人間関係が広がった。 ・福祉関係者との関わる機会が増えた。 ・福祉のことが知れた。 ・メンバー確保の問題が大きいが、それでも規定を設けるなどし、活動を行っている。
C氏	<ul style="list-style-type: none"> ・日常ではあまり関わることができない人たちと関わった。 ・グループのメンバーと関わりが持てたことに喜びを感じる。
D氏	<ul style="list-style-type: none"> ・普段からあまり接点のない人の考え方が分かった。 ・理解が浅いと思われる福祉の領域のことに対して理解が深まった。
E氏	<ul style="list-style-type: none"> ・活動対象者から信頼されていることを実感した。
F氏	<ul style="list-style-type: none"> ・活動対象者から否定的な態度をとられることもあるが、肯定的な反応を示してくれる人もいた。 ・福祉機関の職員と関わるが多くなった。
G氏	<ul style="list-style-type: none"> ・活動対象者が自分のことを心配してくれる。 ・同じ志を持った仲間との出会い、共に活動できることに喜びを感じる。 ・老後の備えとして、福祉施設のことを知っておきたい。
H氏	<ul style="list-style-type: none"> ・グループには、異性の存在が重要と考えている。 ・多様な人々と知り合い、多様な考えがあることを認識した。
I氏	<ul style="list-style-type: none"> ・居住している近隣の人々よりも、グループメンバーの方が、関わる機会が多くなっている。 ・活動対象者と出会うことで、関わる人が増えた。

4. 考察

都市コミュニティは、人間関係の省略を伴いながら発展している⁴⁾ことや、大都市では生活様式に幅があるだけに人間が孤立化しやすい⁵⁾ことが過去の研究からも指摘されている。また、ボランティアを行うことが活動者にもたらす影響については主に心理学領域において研究されており、援助成果⁶⁾、援助者同士の関係の深化・ネットワークの獲得・女性の家庭外役割の獲得⁷⁾などが明らかにされている。そして、ボランティアの継続要因を探究する研究として米澤⁸⁾は、ボランティアを辞めたいと思ったことのあるボランティアの意識（ボランティア休止希望）という側面から、ボランティアの継続要因について質問紙票による調査を行い、「相談相手」「人的資源」「時間」の不足、「地域意識」への愛着の低さを感じている程、ボランティア休止希望が高くなり、ボランティアを仲間と一緒に出来る『楽しみ』だと感じている程、ボランティア休止希望が低くなることを明らかにしている。

これらの先行研究を踏まえ、本研究では、都市コミュ

ニティでの人々の支えあいを深めるためには、ボランティア活動が重要と考え、人々がボランティア活動をはじめ背景・きっかけと、継続に関する事項に着目し研究に取り組んだ。そして、本研究における分析結果から見えたボランティア活動をはじめ背景・きっかけと、継続に関する事項をインタビュー対象者各9名に当てはめた結果が表6である。

表6から見えることとして、まず「内発的活動型」では、4名すべてに自己評価が含まれていた。このことは、自分の活動を評価されたり、自分の存在を評価されると、活動継続につながりやすいことが示唆されたといえる。「外発的活動型」では、背景・きっかけと活動継続に関する事項についての傾向は見出せなかった。他者からの誘いや地域に対する思いなどから始まる活動には、様々な事項が数多く関わっていることが伺えた。「社会関係構築型」では、3名のうち2名が人間関係拡大を含んでいた。このことは、他者とのつながりを求めてボランティアを行った結果として、人間関係の広がりが実感でき、活動が継続しやすくなることが伺えた。特に、本研究に

表6 背景・きっかけとボランティア活動の継続に関する事項の関係

氏名	背景・きっかけ	継続に関する事項
A氏	内発的活動型	自己評価 ・ 活動評価 ・ 仲間意識の高揚
B氏	内発的活動型	自己評価 ・ 活動評価 ・ 人間関係拡大 ・ 知識・情報の蓄積
C氏	外発的活動型	人間関係拡大 ・ 仲間意識の高揚
D氏	外発的活動型	知識・情報の蓄積
E氏	内発的活動型	自己評価
F氏	社会関係構築型	自己評価 ・ 人間関係拡大
G氏	内発的活動型	自己評価 ・ 仲間意識の高揚 ・ 知識・情報の蓄積
H氏	社会関係構築型	自己評価 ・ 知識・情報の蓄積
I氏	社会関係構築型	仲間意識の高揚 ・ 人間関係拡大

おける活動継続に関する事項からも、志の高い仲間と共に活動できることへの喜びや満足感といった仲間意識の高揚が継続につながりやすいという側面が見受けられたため、その点に関しては先に述べた米澤の研究と同様といえ、注目すべき点といえる。

以上のことから、ボランティア活動をはじめの背景やきっかけは、人によって様々であるが、活動継続には、ボランティア同士だけでなく広く地域の人々と交流し、人間関係を広げ、自己の活動について肯定的な評価を実感していくことが大切であり、また、共に活動するメンバー間での仲間意識の高揚も、活動の継続には重要ということが伺えた。

今回、分析方法として用いた SCAT 法は、考案者の大谷⁹⁾によれば、この手法を記した論文のダウンロード数が 2,000 件を超えており、教育学を中心に臨床心理学や医療分野、ヒューマンサービス研究といった幅広い分野で用いられつつあるという。このことから、SCAT 法には一定の信頼性があることが伺え、社会福祉の研究にも応用可能であると考え取り組んだ。本研究では、インタビューによるテキストデータからボランティア活動を行う背景・きっかけ及び継続について SCAT 法を用いた分析から概念化に取り組んだが、今後はこのような手法を用いて、より多くのボランティア活動者の内実を分析し、地域において多くの人々が長く活動を継続できる要因を探っていきたいと考えている。

引用文献

- 1) 内閣府：「高齢者のライフスタイルに関する調査」(2009)
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h21/kenkyu/>

[zentai/index.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h21/kenkyu/zentai/index.html) (2012/12/05 参照)

- 2) 厚生労働省：これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書「地域における『新たな支えあい』を求めて - 住民と行政の協働による新しい福祉 - 」(2008)
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7a.html> (2012/12/05 参照)
- 3) 大谷尚：4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 - 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き - . 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要教育科学 54 (2), pp. 27-44 (2008)
- 4) 高橋勇悦：都市化社会の生活様式 - 新しい人間関係を求めて - . 学文社, pp. 47 (1984)
- 5) 籠山京編：大都市における人間構造. 東京大学出版会, pp. 311 (1981)
- 6) 妹尾香織・高木修：援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果. 社会心理学研究. 18 (2), pp. 106-118 (2003)
- 7) 大坂紘子：中高年女性のボランティア開始後のライフコースとネガティブ・イベントへの対処. 社会心理学研究. 24 (1), pp. 1-10 (2008)
- 8) 米澤美保子：ボランティア活動の継続要因. 関西福祉科学大学紀要 14, pp. 31-41 (2010)
- 9) 大谷尚：質的研究シリーズ：SCAT (Steps for Coding and Theorization) 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析. 手法感性工学 10 (3), pp. 155-160 (2011)